

非選択的運と平等なる処遇

——ロナルド・ドゥオーキンによる「資源の平等」アプローチを手がかりに——

西 口 正 文*

Brute Luck and Equal Treatment:
By the Clue of *Equality of Resources* Approach by Ronald Dworkin

Masafumi NISHIGUCHI

構成

[α] 問題の提起

[β] ドゥオーキン流思考実験の意義

[γ] 仮想保険事業計画という装置の發揮する作用

《その1》倫理的に敏感な正義論という要求への応答 《その2》二様の運への対処戦略

[δ] 反平等論者からの批判とその論拠

[ε] G・A・コーエンによる批判的論及

[ζ] 平等論的正義の探究にとっての位置価——結びに代えて

[α] 問題の提起

この小論は、間柄的存在としての人-間の生き方・在り方を、その正しさや善さの探究という方向性をもって考え抜こうとする志向に発して、探究のための手がかりをロナルド・ドゥオーキンによる「資源の平等」アプローチに見出し、そこから汲み取ることのできる思考の契機を明らかにすること、さらに、件の探究が一つの平等論的正義論という構制を以って推進されようとする際に立てられて然るべき問いが未だ自覚的には立てられておらず、それゆえその探究が為されぬままに残されている問題点を明らかにすること、これを目的とするものである。ひとまずはおおまかに述べたところの上記目的について、その焦点を絞るかたちで述べ直すと、非選択的運に向けて平等なる処遇とは如何にあるべきかという問いを、ドゥオーキンによるアプローチはどのように解こうとしているかについて把握し、同時に、その問いへの解として不十分な点を剔抉する、ということをも目的とする試みである。

こうした探究はいまこの時代の趨勢から（社会風潮や世相から）強い逆風に曝されている。“グローバル化した競争的環境”下での競争的活動単位（大きくは国民国家という全体社会、小さくは現代資本制市場システム内に蠢く企業などの各種事業体）にとっての貨幣的富の増殖というかたちでの“成長”が重要視され、そうした活動単位に關与する・かかわらざるをえぬ経済環境に置かれてある個人には通俗的な勤勞倫理が——分配的正義のあり方に関する思索を

*人間関係学科 教授

欠いたそれが——説かれる中で、正面切って正義を探究しようとする知的営みは、あからさまな禁圧を受けずとも、黙示的には不歓迎の視線を浴び冷遇されることにもなりがちである。このような逆風を意識すればこそ、いっそう粘り強く件の探究に取り組む必要がある、という心的構えをもって小論は試みられる。

ジョン・ロールズによる『正義論』(1971年)の発表とそれへの多大の反響を嚆矢とする(そう言っても過言ではないだろう)現代の正義に関する理論的探究的議論の興隆の中に、ドゥオーキンが投じた理論的衝撃力は正当に受け留められるべきであろう。ひとそれぞれにとって責任を負うべき事柄とそうでない事柄を切り分けようとするものの可能性に考察の視軸を向け、その上で平等な分配や処遇の対象と為しうる事柄を捉え直そうとするその理論企図は、ロールズによる理論構成に大きな意義を見出すとともにその限界にも思い及ぶことになった者にとって、新たな展開方途を指し示してくれる議論として、重要な性質を確かに持っている。そのように重要な性質を持つドゥオーキンによる理論企図の中心に位置づくと思われるところの、＜非選択的運と平等なる処遇＞という概念装置に照準するかたちを採って、小論は考察し、よってドゥオーキンによる理論企図の意義と限界を明らかにする心算である。

〔β〕ドゥオーキン流思考実験の意義

2000年に公開されたドゥオーキンによる主著のひとつ〔ロナルド・ドゥオーキン 2000→2002〕の中で◆¹⁾、分配的正義を実現するための彼によるアプローチが「資源の平等」(equality of resources)というアプローチとして示されている。このアプローチのもつ特質はまず何よりも、既在の社会システム内での富の所有や分配や各人の処遇に纏わる秩序による行為の(意識をも含む行為の)拘束や惰性化からは距離をとって、囚われなき純化された正義の探究を行なうために、ドゥオーキン流の独特の思考実験が駆動するアプローチになっているところに、見出せる。その思考実験の真髄を示すために、ここで忠実にドゥオーキンによる(思考実験の始発点を表わす)記述を引用しておこう。

いま、船の難破で生き残った大勢の人々が、資源が豊富にあり現地人のいない無人島に漂着したと想定しよう。……………これらの移住者は次のような原則を受け容れている。すなわち、島のどの資源に対しても、他人に先立って権利を与えられている者はおらず、むしろ、これらの資源は人々の間で平等に分割されねばならない、という原則である。……………彼らはまた、資源の平等な分割について、私が羨望テスト(envy test)と呼ぶ次のようなテストを(少なくともさしあたっては)受け容れている。すなわち、ひとたび分割が完成したとき、移住者のうちの誰かが、自己の資源の束よりも他のある人間の資源の束を愛好するようなときには、いかなる資源の分割も平等な分割とは言えない、というテストである。〔ロナルド・ドゥオーキン2000→2002:96〕

初発の時点においては資源の所有について有する権利において対等である——他の人と比べて資源をより優位に所有するにあたいするような個人が存在しない——諸個人の間で、資源分配をどのようにするかを考える、という場面設定であって、それゆえ資源の分配に当たって平等をめざすのである。こうした理解に際して注目すべきなのが、資源の平等なる分配方法とはただ機械的単純さを以て平等な量・質へと資源を各人に分かちつというのではなくて、謂う所の羨望テストを充足する分配でなければならない、としているところであり、そしてそこにこ

の思考実験の特徴があるのだ。羨望テストを充足する分配を行なうために持ち出されるのが、ある種の競売のような機能を演じる市場装置である。この点に関するドゥオーキンによる記述を確認するために、（さらに長い引用になることを厭わず）次に引用しておこう。

いま、分割者が各々の移住者に同じ数のはまぐりの貝殻を手渡し……………、次のような形態の市場で貝殻を模造貨幣として用いることにしたと想定しよう。島にある各々の品目（これには移住者自身は含まれない）は、それぞれリストに載せられ、売却されるべき一口として数えられる。……………競売人は、それぞれの品目に対する一組の値段を提案し、この一組の値段が市場の品目をすべて売りさばくことになるか否か、すなわち、当該の値段で各々の品目につき唯一の購買者が存在し、品目がすべて売切れになるか否かを知ろうとする。もしそのようにならない場合には、市場の品目をすべて売りさばくような一組の値段に達するまで、彼は自分の定める値段を調整していく。しかし、このプロセスはここで停止するわけではない。というのも移住者の各々は、まず最初に市場の品目を売りさばくような一組の値段が達せられたときでも、自分の値付けを変更することや、異なった品目を提案することさえ依然として自由に行いうるからである。しかし、このような気の長いプロセスもやがては終り、すべての人々は自分が満足したことを宣言し、したがって、資源も満足のいくかたちで分配されたと想定しよう。／今や、羨望テストは充足されたことになるだろう。他人が購入した一組の財を羨む者は誰もいないだろう。というのも、仮定上、彼は自分の貝殻でいま手にした財の束の代わりに彼が羨む当の束を購入しえたはずだからである。また、財の束の組み合わせの選択も恣意的ではない。……………上記の手続で現実が生じた束の一組は、次のような長所を有している。すなわち、ここにおいて各々の人間は、模造貨幣が当初は平等に保有されているという前提から出発して購入活動が続けることによって、現実を選択された束の一組の決定に際して平等な役割を演じた、という長所である。〔ロナルド・ドゥオーキン2000→2002:98-99〕

引用文から見て取れるように、先ほど述べた「ある種の競売のような機能を演じる市場装置」は、各人の主体的選択が十全に為され合うという過程を最大限に尊重しうる装置として、導入されている。さらにまた、黙示的にはあるが、ここでの各人相互の間には資源（財）に関して得られる情報の量と質についての格差も判断能力上の格差もないものと見做されているはずである。そのように見做すことによってはじめて、主体的選択が十全に為され合うという過程を踏んだ後に、羨望テストを充足するという結果に到り着くことができるからだ。

ドゥオーキン流思考実験の意義は上述のところに見出されること、これをひとまず押えたい。次節ではドゥオーキンによるアプローチの特質をさらに立ち入って考察すべく、仮想保険事業計画という装置によるアプローチの局面が発揮する力を、対象化しよう。

〔γ〕 仮想保険事業計画という装置の発揮する作用

《その1》倫理的に敏感な正義論という要求への応答

ドゥオーキンによる平等論的正義論の理説はその基礎的なところで、「倫理的に鈍感な正義論」と「倫理的に敏感な正義論」とを識別する。前者は、行為主体の選択行為に対応した責任の所在や割り当てについて（言い換えると、選択行為という制御を外れて環境によって規定される事象に対応した責任の非所在ということについて）、認識し判断することに鈍感な議論を

指し示す。それに対して後者は、選択行為と環境（による）規定という区別に対応するかたちで、行為者にとっての責任の所在と非所在とを見分けようとする、そのことに基礎をもつ正義論である。

この識別はドゥオーキンの正義論構想にとって重要な意味を持ち、ロールズによる正義論の弱点をこの識別観点から捉えることができる、とされてもいる〔ロナルド・ドゥオーキン 2000→2002:441-442〕。ロールズの提示する「正義の第二原理」の中に言う格差原理によってでは、行為主体の選択行為に対応した責任の所在や割り当てということへの考慮が為されずに済まされることになっており、倫理的に鈍感な正義論に留まっていると評される。そのように留まることになるのは、協働システムの作動を通じた富の生産総計を重要視すること（——生産総計の増大化を図ること）とその富の特殊な格差付き分配方法（——マクシミムの分配方法）との組み合わせについての合理性に、格差原理におけるロールズの主眼が置かれているからだ◆²⁾。ロールズ正義論の限界を開示するこうした論脈から推察されるように、「倫理的に敏感な正義論」という志向を押し出すことを通じて、平等論的に方向を採る正義論の構想においてドゥオーキンが演じた展開力が重要な意味をもつものと評価されて然るべきであろう。

上記の点に関するいっそう基層を成す言及として、「ロールズは、なぜ原初状態のメンバーたちが自分の将来の身分を知らずに自分自身の自己利益に基づいて格差原理を選ぶのかという点を、満足のいく仕方では説明できていない」〔ドゥオーキン2000→2002:442〕と述べている。これは殊のほか重大に受け留められるべき言及であって、倫理的に敏感たろうとするはずの原初状態における公正な契約という創案が、ロールズ自身の正義理論においては真っ当には展開されずに終わっていて、その論理的な不純さと混沌とが格差原理に集約されている、と捉えることができるだろう。

《その2》二様の運への対処戦略

前項で認識することになった、ドゥオーキンによる責任の所在／非所在に関する論定は、その限りにおいては、次のように整理されて済まされかねない。すなわち、“①行為主体の選択行為→当の行為主体にとって負うべき責任の発生と存在 ②行為主体の選択行為という制御を外れて環境によって・運によって規定される事象→当の行為主体にとって負うべき責任の非存在”というように。ところが、倫理的に敏感なる正義の理論を志向するドゥオーキンの思索は、「運」を一様に捉えて済ますのでなく、それを行為の選択性と関連づけることによって二様に捉えることになる。つまり、選択的運（option luck）と非選択的運（brute luck）との二様に。選択的運とは典型的には賭け事への参入（という選択行為）に伴ってその帰結を当の行為主体が引き受ける、という場合に生じると認識される運のことであり、非選択的運とは予測不可能な災害や事故に遭遇した、という場合に生じると認識される運のことである◆³⁾。行為主体にとってその行為への責任が発生しないのは非選択的運によってもたらされる事柄に対してなのであり、選択的運による帰結は行為主体の負うべき責任に属する、というのがドゥオーキンによる新たな提唱であり、説得力を有する提唱でもある。そこからさらに展開して、非選択的運によって各人の生が左右されることの不公正を——善き生を追求するための機会に恵まれたり恵まれなかったりということの不公正を——矯正し、しかも各人の選択行為によって負うべき責任を大切にする、その双方を共にねらうことのできる装置として、つまり、平等化を志向しつつ選択的運ということに潜在するはたらきを發揮できる仕掛けとして、仮想保険事業というかたちを採る構想が作為的に設えられ提起されることになる。

この構想の中身をドゥオーキンの設例に即して、把捉しておこう。現実世界における障害（身体障害や知的障害など）をもつ者にとっての非選択的運による生き難さという不公正にどのように対処するか、という点についてはこうなる。すなわち、正義構想のための反事実的思考実験のかたちとして、各人が特定の年齢に達すると障害を被る同一の危険率を有すると想定し、障害者となる割合（確率）は現実社会における現状と変わらないとする。このような条件下においてひとは概してなんらかの特定レベルの保険に入り、障害を被ることになったひとに対してはそのひとの支払った保険料（掛け金）に応じた補償を——一定の補償に対してはどのひとにとっても同一の掛け金が求められる、という規定の下での補償を——すると考えられる。そしてその補償開始後の（時間としては障害を被る全期間の）障害者の資源保有量と非障害者の資源保有量とは、 $[\beta]$ で取り挙げた競売後の羨望テストに耐えられる平等状態にほぼ近似する、そのような資源補償になるように到り着かせることが合理性を持つ。さらに各人の企図や性格の相違にまで配視すると、この保険のための掛け金としてどれだけの投入するかについての相違が、それぞれの人生観や人生計画の相違として出来るであろう [cf. ドゥオーキン2000→2002:109-113]。

いま述べたことは、各人の生得的能力の相違という非選択的運——その最も露わなかたちとしては、平均的能力に比して著しい能力欠如の状態にある者にとってのそれ——からもたらされる生き難さ、これに纏わる不公正にどのように対処するかという点にも、推及される。つまり、こうである。思考実験として、その社会の成員全体における能力分布は総体として現実社会での現状と変わりなく、成員のどのひとも能力欠如によってもたらされる結果に苦しむようになる事態への陥りやすさについて同一の確率を有している、と仮定する。その結果に備えるための保険が用意され、それにはどのひとも同一の条件で（どのひともにも共通するかたちでいくつもの補償段階が、蓋然的合理性を帯びたものとして用意され、それに応じて蓋然的合理性を帯びた保険料がどのひともにも共通に設定されているという条件で）加入することができる。このような条件下で各人はどの程度の補償を求めてどれだけの掛け金の保険に加入することになるか、と実践理性に導かれて問うことを通じて、資源の平等という正義観念に敏感な仕掛けを、しかも各人の選択行為の相違を（選好の相違を）生かすことのできる仕掛けを、考え進めて行けるのである。この保険による補償によって、およそ次のような事柄が期待される。すなわち、なによりもまず各人による意図的な選択行為の相違（人生計画の企図の相違）を生かすことをふまえ、保険による補償がなされて以降の時間において、生得的能力についてさまざまな程度に恵まれなかった者たち——能力分布の（……お望みなら、“諸種の能力分布の”と表わしてもよいことなのだが）平均に比べてさまざまな程度に下回っていた者たち——の資源保有量とさまざまな程度においてそうでない者たちの資源保有量とを相互に比べてみるとして、 $[\beta]$ で取り挙げた競売後の羨望テストに耐えられる平等状態にほぼ近似すると想定される、そのような資源補償になるように到り着かせることが、実践理性に照らして合理性を持つ。ドゥオーキンはこの保険に関して、さまざまな能力の分布のあり方およびそれぞれの能力分布上の各位置づけに該当する確率をも考慮に入れて、もう一步立ち入って次のように述べているが、これも資源の平等という正義観念に敏感な想定としては合理性をもつと言えるだろう。

我々は、各々の能力をどのくらい多くの人間が持つことになるかを人々が知っており、それゆえ自分が当の能力をもつ蓋然性がどのくらいかを人々が知っているにもかかわらず、現実に関心する能力があるか否かは無知であるような状況を想像してみることができる

だろう。このとき人々は、一定レベルである種の特定の能力が自分にないと判ったときに備えて保険に入るものと想定されるだろう。……………このモデルは我々が身体障害に関して構成したモデルに非常に類似したものとなり、それゆえ我々の理論全体にとって理論的な連続性を確保してくれることだろう。さらに我々は、ある種の能力の欠如はもう一つ別のタイプの身体障害（ハンディキャップ）に他ならないという指摘を真面目に受けとることにより、そして一般に能力といわれているもののうちどれくらい多くのものが災害保険の一般的市場へと組み込まれうるかを単純に問うことにより、二つの仮想保険市場を統合することさえ提言できるかもしれない。[ドゥオーキン2000→2002:131-132]

能力の相違は就業上の有利／不利をもたらすわけだが、それが特に所得の上での相違に焦点を合わせて論じられているその要諦を、捉えておこう。思考対象となる社会の成員の各々は、その社会に用意されているさまざまな所得段階での所得を獲得する者の分布割合を知ることができ、自らの選好のありよう（選択意思のはたらきの特徴）を知ることでもできるが、自ら持ち合わせている能力によってどの所得段階に該当することになるのかについては知ることができない、という条件設定が起点をなす。この条件下ではもちろん、所得段階分布上の各位置に各人が該当することになる蓋然性はすべて同一になる。ここに保険事業が導入される。各人の獲得する所得を資源の平等へと漸近させるべく、次のように表現される技巧的な仕掛けがここに取り入れられることになるのだ。すなわち、「被保険者が指定したどれか特定の所得レベルの収入を稼ぐ機会を彼が持てない場合に保険金が支払われることになり、この場合、保険会社は被保険者に対して彼が現に稼ぐ機会を持っている収入と保険の担保範囲との差額を支払うことになる。」[ドゥオーキン2000→2002:133] こうした仕掛けの内部で、この社会の成員たちにとって保険金として担保される所得段階それぞれに応じて支払う掛け金が、保険提供側と加入側との相互的熟慮と吟味の過程を経て、しだいに決まってくるであろう。そのようにして、通時的なまとまりにおいての羨望テストにも耐えられる（所得面での）資源の平等様態が、近似的にではあれ期待できることになるだろう。

〔δ〕反平等論者からの批判とその論拠

ドゥオーキン流の平等論的正義論に向けて投げ掛けられる、反平等論者からの批判とその論拠を、ここでは対象化する。かなりの程度まで洗練度合を高めた反平等論者からの批判的議論として盛山和夫による議論を主な素材にして、三点に絞って論点を取り挙げることにする。

第一に、環境による規定に対しては平等化処遇を、行為主体の選択意思の発動結果に対しては当の行為主体への帰責に基づく対処を、という（ひとの処遇原則における）仕分けが、平等論的正義論を唱える者の思想傾向からはともすると、前者を過大に評価し後者を過小に評価することに傾斜しがちである、という批判◆⁴⁾。この批判によると、平等論的正義論の不当性が顕著に現われるのは行為主体の「努力」が傷つけられるところだ、とされる[盛山2006:170-171]。この種の批判が平等論的正義論者たちの招きがちな一般的傾向を粗野なかたちで指摘しているのは一応認めることができるが、ドゥオーキンの所説に噛み合うものになっているかと問うならば、噛み合っていないと考えるべきだろう。件の仕分けを慎重に綿密に行なおうとするのが彼の所説の特質なのであるから。

第二に（これはここで取り挙げている批判論者にとって上記第一の点と連続する批判内容になると考えられているものなのだが）、件の仕分けが特に非選択的運に恵まれぬ者に対する処

遇において不正義をもたらすに到る、という批判。それはなぜかという理由についてこの批判では、「環境による規定に対しては平等化処遇を」という原則が非選択的運に恵まれぬ者への負の評価を（恥辱を）刻印することになるからだと言う。その点を盛山は、E・S・アンダーソンの所説を援用するかたちで次のように記している。「精神的・身体的な障害を持つ人々がその境遇に『責任がない』と社会的に判断することの中には、そうした人々に対する『私的なさげすみ』を『公的に認められた真理』へと押し上げてしまい、思いやり（compassion）ではなく、憐れみ（pity）による侮辱的なスティグマがもたらされる危険がある」[盛山 op.cit.171頁、同様の趣旨を盛山2004:184-186においても確認できる]。こうした論脈で盛山はさらに、ドゥオーキン流の平等論的正義論が実践される社会における非選択的悲運という状態にある者への補償（資源の平等のための分配）が行なわれるにあたって、次のような論理が前面に出されることになるはずだとして、アンダーソンの言説を直接に引用して示している。すなわち、資源の平等のための分配を担当する機関たる「国家平等委員会」から障害を持つひとたち宛てに送られる手紙で書き記されるはずの文言としての下記言説を。

障害者たちへ：あなた方の生まれつきの劣った素質と現在の無能力とは、悲しいことに、健常者と比べてあなた方の生を生きる価値の劣ったものにしています。この不幸を補償するために、われわれ健常者は、あなた方の生きる価値を十分に良いものにすべく、あなた方に追加的な資源を供与します（Anderson 1999:305）。

殊のほか露わに表出されたこの論理に向き合ってみるならば、ドゥオーキンによる「資源の平等」論だけでなくロールズ以降の平等化を志向するリベラリズムが取り組もうとしたところの初発の問題構制が、いま対象化しようとしている批判論者には共有されず拒斥されていること、そのことが窺い知られる。この批判論者にとっては、各人の発揮する能力の成果は各人に帰属すると考えるのが妥当であって、発揮する能力の成果において劣位にあることはそのひとの生の価値が劣位にあることに結びつくと観るのが当然視されてもいる。

第三に、平等論的正義を志向する場合の致命的欠陥として、資源の生産力を高めるための誘因を損なってしまうという帰結に鈍感であるという点が、強調される。よりいっそう高度な資源の生産力の達成へと駆動するための誘因は、高度な生産力の達成に貢献できる能力を発揮して成果を挙げることのできるひととそうでないひととを序列的に評価して、その貢献度に応じたひとへの優劣序列化の処遇方法を採用すること無しには獲得できない、と説かれるわけだ[盛山 op.cit.172-174頁、盛山2004:192-194]。つまり、ひとの“欲望のありよう”をふまえて謂う所の「誘因」を調達するには、私的所有原則が、そして自己所有権原理が、依拠されるべき自明の前提であると考えられているのである。こうして観てくると、ここに素材として取り挙げた議論における批判の論点は、結局のところ、社会的正義の実現にとってはよりいっそう高度な資源の生産力が必要不可欠であると見做すこと、そのための誘因として自己所有権原理が基礎に置かれるべきこと、という主張に収斂する。このような主張が正当であるのかどうか、という問題意識から、そもそもドゥオーキン流の平等論的正義への探究が始まっていると解することができるのであり、それゆえに、その問題意識や探究の方向と照らし合わせるとき、この批判論は——たとえ議論展開の細部における技術上の洗練度合を高めた内容をもってはいても、この手の批判論は——真に噛み合う内実になっていると言い難い。

〔ε〕 G・A・コーエンによる批判的論及

ドゥオーキンが提示する平等論的正義への志向を共有しつつも、その理論構成に向けてはなお問題化されるべき不明瞭な点が指摘されるべきである、と論立てするのが、ジェラルド・アラン・コーエン [G・A・コーエン1989] ◆⁵⁾ である。コーエンによるその論立てからは、ドゥオーキン流の平等論的正義論の意義と限界を明らかにしようとする小論の企図にとって触発される論点を見出すことができるので、ここでその論点を採り挙げておこう。

第一に、ドゥオーキンによる「資源の平等」(equality of resources) 論は「福利の平等」(equality of welfare) 論と相容れぬかたちで区別されるものとして、ドゥオーキン自身によって述べられている。ドゥオーキンによるこの識別観点を承認した上で、コーエンは次のように「資源の平等」論の限界に論及する。まず、各人にとっての効用や欲求充足という主観的な満足度合という面での平等化が図られる福利の平等では各人の持ち合わせている欲求水準によってもたらされる格差が温存されるところからして、福利の平等が平等論的正義の志向にとって多分に限界を有する。次に、享受する福利についての客観化と平等化を図ろうとするための原則である「さまざまな種類の福利を享受するための機会の平等」原則に依拠しようとする場合には、福利の享受が望まれるひとにその機会を生かせる能力が備わっていないはずだという点、この点への対処が為され難い。さらに議論を進めてコーエンは、資源の平等もまた限界を有すると見て取る必要があることに論じ及ぶ。なるほど各人の選好を生産－競売装置を通じて生かすことのできる過程が——各人の企図に基づく選択意思の発動が重視されることによって、各人にとっての効用や欲求充足を生かす過程が——、資源の平等においては重視されるとはいえ、その過程には困難な問題が抱え込まれている。資源の平等という原則の下では獲得する資源という面での平等化が図られるわけなのだが、その平等化の際には、各人の選好を生かすことが同時に考慮に入れられてもいる。つまり、多様な選好に帯びがちな主観性に対して羨望テストを通して客観化するという方略が採られる。その種の方略によって、多様な選好に随伴して現われるであろう、各人にとっての主体的な効用や欲求充足のありようが、いわば合理化されることになるだろう。かくしていわば合理化され得るように、各人にとっての主体的な効用や欲求充足という部面が考慮されている。しかしながら、この部面とは識別されるべき部面でありしかもこの部面も包含するより広い部面を言い表わそうとする概念として「基本的な水準での生き易さへの接近方法」を用いて述べるならば、まさにその基本的な水準での生き易さへの各人にとっての接近方法という部面においては、依然として看過しがたい不平等が温存される。たとえば、きわめて稀にしか見られない障害のゆえに甚だ高価な車椅子がその生き易さにとって必要となる障害者にとって、しかも彼が生きている社会に同じ障害を持つひとが他にほとんどいない、そのような障害者にとって、資源の平等の理念にそぐわしいかたちで高価な車椅子という資源が生産－競売装置を通じて得られるか、と問うならば、否という答えになる◆⁶⁾。この論点においてコーエンが主張するのは結局のところ、平等論的正義の志向にとっては福利の平等でも資源の平等でも不十分であり、基本的な水準の生き易さへの接近方法の平等 (equality of access to advantage) 化こそが大切となる、ということだ [Cohen, G. A. 1989: 916-921]。

第二に、平等主義に向けてのドゥオーキンによる解釈の仕方では、ひとはその物質的資源と(精神的であれ身体的であれ) その能力の欠落に対して補償されるべきであって、その嗜好もしくは選好へと帰着させられるような欠落に対しては補償されるべきでない、ということにな

る。つまり、各人の取り分は、事物を獲得する能力の相違に応じたものではなく欲したり追求したりする企図の相違と対象事物の相違に応じたものになるべきだ、とされる。補償されるべきは何かについて言い換えると、各人の能力欠落（ドゥオーキンはその内資源の欠落とも言う）というありように対しては補償を、各人の企図のありようおよび選好や嗜好のありように対しては不補償を——当人の負うべき責任を——、ということになる。この解釈に対してコーエンは、異議を提起する。すなわち、能力欠落というありようが当人による自制心を欠いて怠惰な生の積み重ねとして生じているのか、それとも非情な非選択的な不運から生じているのか、という点を見極める必要があること、同じように、選好や嗜好のありようが当人の主体的自発的意思の発動による選択として生じているのか、それとも当人には如何ともしがたい環境による規定力によってもたらされているのか、という点を見極める必要があること。要は、選好（や嗜好）と能力との間に切り口があるのではなく、選好と能力それぞれの内実において探り当てられるべき、当人の責任と非選択的運との間にあるのだ、と異議提起するわけだ [Cohen,G.A. 1989:921-924]。

第三に、ドゥオーキンが提唱する仮想保険事業計画という平等化のための装置について、コーエンは次のように評価する。その装置において各人は自らの人格にどんなことが属しているのかを知っている——その裏面として各人は自らの人格に属すること以外については知らない——という設定なのであり、それは＜無知のヴェール＞の被せ方としては薄く被せる設定になっている。コーエンは、（既に前段落で触れた）第二の論点において批判的に捉え直しているように、選好や嗜好という（ドゥオーキンの所説においては）自らの人格に属しているとされることが即、自らの責任を負うべき事柄になるとは限らないと、非選択的運に該当する事柄も含まれると、観るから、仮想保険事業計画のあり方として支持できるのはその事業計画が各人の非選択的運に関する事柄についてよりいっそう深い＜無知のヴェール＞を被せられるという条件のもとに創案される場合である、という結論になる [Cohen,G.A. 1989:931]。

第四に、行為主体の選択意思の発動はまったく純粹なこと——まったく主体性や自発性や自律性の発動——としては考えることができない、というふうに捉えている。換言するならば、非選択的運による規定と選択意思の発動との識別はそれぞれの事象によって絶対性を帯びた峻別として自ずと為され得るのではなくて、両者が混在している様態を対象化していずれが重きをなすかを判断するかたちで行なわれる識別だ（その意味で、程度の問題だ）というふうに捉えている◆⁷⁾。そして、選択意思の発動主体が当の選択行為に関連する適切なる情報を持てば持つほどより純粹な選択行為に近づく部面を導き入れることができる、というふうに捉えている [Cohen,G.A. 1989:934]。

以上の論点は、ドゥオーキンによってこそ切り拓かれた、平等論的正義の志向にとって拠点とすることのできる視座の提示の仕方を（“切り口”の提示の仕方を）いっそう練り上げようとする内実を持つ、と観ることができよう。

〔ㄗ〕 平等論的正義の探究にとっての位置価——結びに代えて

ここまでの行論を通して小論は、平等論的正義の志向を理論化しようとする試みにとって有するロナルド・ドゥオーキンによる創案の意義を把捉しようとした。平等論的正義の志向にとって、ジョン・ロールズ『正義論』における原初状態に関する議論の——なかでも特に＜無知のヴェール＞の——触発力は多大であったのだけれども、正義の第二原理の中で示される「格差原理」に関する議論には、それが果たして原初状態に関する議論と整合するのかどうか

かという疑念を抱かせる（あるいは不満感を抱かせる）要素が見出された。そうした疑念に応じる内容を含みつつ、正義への志向をいっそう本格的に理論化する構想として、ドゥオーキンによる構想を受け留めることができる、ということを論じたわけである。その構想はしかし、さらに問い直され練り上げられるべき余地を残しているものであって、そのような残された課題について、G・A・コーエンによる（ドゥオーキンの視座に向けての）論及に導かれるかたちで省察しようとした。小論でのこのような探究をふまえて、ドゥオーキンによる理論的起爆力をセンヤコーエンによる正義構想と繋げてさらに包括的な視野から平等論的正義志向の理論化方途を探究すること、これを今後の課題としたい。

【註】

- (1) より正確に言うならば、2000年に公刊された主著のひとつ〔ロナルド・ドゥオーキン2000→2002〕における第一章「福利の平等」と第二章「資源の平等」とは1981年に *Philosophy and Public Affairs* 誌の第10巻3号と4号とに発表されていて、その中で「資源の平等」アプローチの骨格が既に表示されている。
- (2) ここに示した理由付けは、格差原理を提起しそれを正当化するロールズによる議論と格差原理に対して批判的に言及するドゥオーキンによる議論〔ドゥオーキン2000→2002:441-442〕とを繋ぎ合わせて考えることによって、最も簡潔に述べたものである。
- (3) ここで留意しておきたい点として、生得的能力において恵まれているか恵まれていないかということ（生得的に障害を持つかどうかも含めて）は非選択的運に属することだ、と（正当に）認識されている点がある。
- (4) この批判の内容をもう少し補足しておこう。世界に生起する諸事象を“自由意志”による事象と“因果連関の必然性”による事象とに区分することができる、という思念を前提にして、各行為主体にとっての責任に属する事柄と平等な取り扱いがなされるべき事柄とを切り分けていく、という論立てにおいては、それを推し進めるとやがて自由意志の純粋に・全体を覆うかたちでの展開ということの不可能であることが気づかれることになるはずだ、と盛山は批判の議論を運ぶ。そこでようやく、そうした論立てに拠ってたつ平等論的正義論の破綻が明らかになる。以上のように批判するわけである〔盛山2006:174-178〕。

なお、ドゥオーキン自身はそれほど単純な切り分けができると考えていたわけではない。その点については、ドゥオーキンの倫理的責任論を主題とする長谷川晃による論文〔長谷川晃2004〕が示唆に富む。

- (5) この論文は、平等論的正義に関する議論の今日的な（——と言っても、この論文の発表年から、20世紀80年代の終わり頃の）広まりに関して論じるという内容である。その中の一部分においては、平等論的正義へと向かう志向に発して富の分配の在り方やひとの処遇の在り方について規範的に探究しようとするにあたって、平等論的正義のためのドゥオーキンによる規範的切り口の重要性をふまえた上で、さらにそれを捉え直そうとする論脈を、記している。
- (6) この点は、ドゥオーキン自身によっても自覚されている（たとえば〔ドゥオーキン2000→2002:113-116〕）。

コーエンはさらに次のような奇抜な例を以って、資源の平等化を以って問題が解決できるわけでないことを説いている。自分の腕を他人に劣らず（むしろよりうまい具合に）動かすことができるのだが、腕の運動後には筋肉の強い痛みが必ず伴う、そしてその痛みを緩和させるには高価な薬が必要だというそのようなひとがいるとして、そのひとの生き易さ／生き難さという観点から考えると、うまく動く腕を持っていることは資源の平等という点で不利ではない——そのことに対する補償は不必要である——けれども、強い痛みを事後に伴うことは福利の平等という点では不利であり、痛みを和らげるための薬を購入することにおいては福利のための機会の平等（≒資源の平等）という点で不利である——これらのことに対する補償は必要である——、という例である〔Cohen,G.A.1989:918-919〕。こ

これらの事例についてはしかし、ドゥオーキンによる仮想保険事業という装置の導入が、高価な車椅子獲得などのための費用負担についてのいわば共同化の実現を（そのまっとうなる実現ということには困難を伴うはずなのだが、）期待させてくれるのではないか、という点が問われてもよいだろう。この問いに向けてはしかしながら、暫定的に次のように答えておこう。すなわち、ドゥオーキンによって導入されるその装置は基本的に、保険市場として運用可能な範囲で想定されているので、懸案の、費用負担についての共同化を実現することが、その見込みをあまり持てないように推測される、というように。

- (7) ただしこの点は、ドゥオーキンの認識がまったく到り得ていない点だとは、言い難いように思われる。たとえばドゥオーキンの主著 [ロナルド・ドゥオーキン2000→2002] の第9章特に434頁を参照されたい。

【文献】

Anderson,E.S. 1999, “What Is the Point of Equality?” *Ethics*, Vol.109, No.2

Cohen,G.A. 1989, On the Currency of Egalitarian Justice, *Ethics*, Vol.99, No.4

ロナルド・ドゥオーキン（小林公・大江洋ほか訳）2000→2002 『平等とは何か』木鐸社

（=Dworkin, Ronald 2000, *Sovereign Virtue: The Theory and Practice of Equality*, Harvard University Press）

長谷川晃 2004 「ロナルド・ドゥオーキンの倫理的責任論」（塩野谷祐一・鈴木興太郎・後藤玲子編2004『福祉の公共哲学』東京大学出版会）

盛山和夫 2004 「福祉にとっての平等理論——責任-平等主義批判——」（塩野谷祐一・鈴木興太郎・後藤玲子編2004『福祉の公共哲学』東京大学出版会）

盛山和夫 2006 『リベラリズムとは何か』勁草書房